

ナーダムの夏

浦野 裕司

乾いた大地に草が疎らに生える土地、ゴビ。大地は乾いていても、人の心はいつもあたたかなもので潤っている。南ゴビ・ハンホンゴル村への旅も、六度目となった。

今回の旅の大きな目的の一つは、村のナーダムの見学だ。ハンホンゴル芸術専門学校のボルド校長から「八月八日、九日に村の九十周年記念のナーダムがあるから、その日に合わせて来たかどうか」というお誘いがあったのだ。そしてもう一つの目的。それは、二年前に訪問した

時、炭鉱開発のための試掘が始まった村の、その後の様子を確かめることである。

今回の旅は、参加を希望していた友人・知人の夫妻三組がすべてキャンセルとなってしまいあきらめかけていた所へ、ぎりぎりになって次々と参加希望があった。二年前の旅ですっかり南ゴビの自然とハンホンゴル村の人々に惚れ込んでしまったマリとミキの二人に加え、モンゴルへの旅は初めてというマナ、カナ、ヨ

ーコ、マハ(すべて仮名)。それに現地のガイドをいつもお願いしているニュークローバー・トラベルの青年社長シヤガイ君と、ツアーコンダクター役の私の総勢八人の旅となった。

再会の朝

昇ったばかりの朝日が眩しい六時十五分、南ゴビ・ダランザドガドのゴルバンサイハン空港に降り立つ。湿気も汚れも、何の混じり気も無いような爽やかな空気を胸いっぱい吸う。小さな空港の建物に近づくと、今回もまたお世話になるボルド校長(ハンホンゴル芸術専門学校)の笑顔が待っていた。その後ろに体格のよい、いかつい男性もいる。ハンホンゴル村に滞在中、運転手を務めてくれるようだ。「ユージ」と声をかけながら、ぶ厚い手で握手を求めて笑う。笑うと途端に愛嬌のある表情に変わるその顔には見覚えがある。たしか学校の職員だったはず。だが名前を覚えていない。しかたな

く
「お名前はなんでしたっけ・・・?」
と尋ねる。男はすかさず、
「オレの名前を覚えていないのか」と怒ったように言う。

「名前はマンダツハ。前に会ったことがあるのに、ユージは忘れたのか」

今度は悲しそうに言う。

「すみません、また会えてうれいです」

私は「オーチラレー(すみません)」を何度も繰り返し詫びた。

いつ会ったのだったか思い出すために、帰国してから過去の旅の写真を見て分かったのだが、マンダツハは、七年前の訪問の折に学校で行われたお別れパーティーで出会った教職員の中の一人だった。名前を覚えるのが大の苦手の私が覚えていないはずもないのだが、覚えていてほしかったという気持ちは心に響いた。五日間の滞在中、マンダツハにはずっとお世話になるとともに、その剽軽な性格、や

さしい心遣い、そして何よりも巧みな運転技術でたくさんの思い出を残してくれたことになる。

ゲルキャンプへ

ロシア製四輪駆動のワゴン車に八人の荷物を積み込むと、一路ハンホンゴル村へ。二か月間まったく雨が降っていないという乾ききつた草原の道を、ワゴン車は砂埃を上げて走る。マンダツハは、先を走るベンツが気に食わないのか、スピードを上げてあつという間に追い越した。

空港を出て四十分後、ハンホンゴル村中心部から少し離れた場所にある、私たちのために用意してくれたゲルキャンプに到着。見回す限り何もない大草原の真ただ中に、二棟のゲル。それと、ゲルから百メートルほど離れた場所に穴を掘って作った簡易トイレだけの贅沢な空間だ。

到着すると、ボルド校長のオユーマ夫人、次女のジャガーが迎えてくれた。ゲ

ルキャンプ滞在中、この二人が食事の世話をしてくれた。それにもう一人、出迎えてくれたちよつとシャイな三十代の男性、バツソーシ(寄宿舎の舎監)も、滞在中何かにつけお世話をしてくれることになる。

荷解きをする間もなく、ゲルにパンとジャム、それにお粥の簡単な朝食が運ばれた。パンとお粥の組み合わせには戸惑ったが、日本人は朝、お粥を食べるとどこからか聞いたオユーマ夫人が、少して日本人の口に合う食べ物でもてなそうと考えて作ってくれたらしい。夏休みのため帰省中の長女のエンクマー(ウランバートルの医大生)に、日本のお粥の作り方を調べさせたという。モンゴルでお粥といえば、砂糖を入れてミルクで煮た甘いミルク粥で、どちらかといえばデザート感覚の食べ物だ。日本人は塩味だけで大丈夫だと知って「本当に日本人はこんなものを食べるのか」と、とても驚いていた。

村の創設九十周年記念ナードム

朝食を食べるとすぐに、車で五分ほどのナードム会場へ向かった。ナードムとはモンゴル語で「祭り」のこと。競馬、相撲、弓射の三種の競技が行われる。最も大きなナードムは、七月十一日の革命記念日にウランバートルで行われる中央ナードムだ。その他、夏の間に全国各地の県や村の単位で開催され、モンゴル人にとっても重要なお祭りとなっている。

ハンホンゴル村のナードムの主会場となるのは、村の相撲スタジアム。スタジアムといっても、草原そのままのもの。小学校の校庭ぐらいの広さの草原をロープでぐるりと円形に囲み、膝ほどの高さには張られたロープに色とりどりの三角旗を取り付けた簡易的なものだ。ただ正面の位置（南向き）には見学用の建物があって、山盛りのお菓子のお供えの前に村の重鎮や来賓らしき古老が座っている。

また周囲には、鉄で作られた二段の見学席が所々に設置されている。周辺には出店やゲルが並び、集まった人たちが軽食をとったり、子どものおもちやを買ったりする様子が見られるのは、日本のお祭り風景とそう変わらない。

村の創設九十周年のお祝いを兼ねた祭りということで、始めにメイン会場のスタジアムで式典が行われた。多くの村人たちが民族衣装（デール）に包まれて式典を見守る。みな晴れやかな表情だ。まず、村長以下、村を代表する人物たちがメイン会場のスタジアムのポールにモンゴル国旗、県旗、村旗など五種類の旗を掲げた。その旗の前で挨拶をしたあと、モンゴリアンブルーと呼ばれる青空のもと、彼らが先頭となってスタジアム会場をぐるりと一周する。その一団の後をグループごとに、先頭を行く者が大きな旗を掲げ、旗に続く人たちが小旗を振ったり手を振ったりしながらスタジアムの内側を歩く。ハンホンゴル芸術専門学校の

教職員や生徒たちも、デールや踊りの衣装などを纏って手を振りながら進む。

主だった人たちがスタジアムを一周すると、ハンホンゴル芸術専門学校の生徒たちによる馬頭琴の合奏と歌が披露された。生徒に交じって、顔見知りの馬頭琴教師も演奏している。演奏が終わると、若い女性ダンサーによる民族舞踊の奉納だ。堂々と、そしてのびやかに踊るダンサーは、一昨年、学校訪問した折に民族舞踊を見せてくれた女の子である。当時は小学生。わずか二年でこんなにも成長し、ナードムの大舞台でソロの踊りを披露しているのには驚く。左足でつま先立ちになり右手を大空に向けて伸ばした姿は、美しさのみならず神々しささえ感じられた。

大草原の競馬

式典のあと、ボルド校長の案内で、スタジアムの周りにある出店のゲルのひとつに入り軽食を食べる。モンゴルを代表

する料理のボーズ（蒸し餃子）とホーシヨール（ピロシキのようなもの）だ。一方は中国、もう一方はロシアの料理にヒントを得ているようだ。どちらも包まれている具は山羊肉だが、とても美味しい。しかも安い。コーラも頼んで一人当たり二百円ほど。物価の高騰が激しいウランバートルでは考えられない値段である。「さあ、次は競馬のゴールを観に行こう」

というボルド校長の言葉に従って店を出る。すると、デールで正装した六十歳ぐらいと思しき女性が近づいてきた。そして、

「日本人ですか」

と尋ねる。

「そうです」

と答えると、

「ダランザドガドで算盤を教えてください。機会があったら訪ねてください」

とにこやかに話して去っていった。まさか南ゴビで算盤を教えているモンゴル人

がいるとは。新鮮な驚きだった。

さて、いよいよ競馬である。すでにスタートしているというレースのゴール場面の観戦だ。

私は東京競馬場のある府中市で育った。ギャンブル好きの父に連れられて、もの心ついた頃から足しげく競馬場に通っていたし、通園していた幼稚園の運動会は競馬場の芝生で行われたぐらいだから、競馬にはずいぶん親しみを感じている。

私はギャンブルをやらないので今は競馬場へ行くこともないが、馬が走る姿を目にすると血沸き肉踊るような気分になる。大草原に憧れるようになったそもその理由は、迫力のある競馬を観戦したり広い芝生を駆け回ったりした、東京競馬場での幼児体験にあるのかもしれない。

マンダッハの運転するワゴン車でゴール付近へ行く。式典の途中から強くなり出した西風に、六月からまったく雨が降っていないという大地の砂が巻き上げられ砂嵐の状態になる。そんな中、子ども

もたちの操る馬が、続々とゴールに帰って来る。騎手は六歳から十二歳、日本の小学生にあたる年齢の子どもたちだ。モンゴルの馬は、サラブレッドに比べればひと回りもふた回りも小さい。騎手の体重が軽くないと、長距離を競うことはできない。編んだ髪がヘルメットからはみ出している女の子の騎手もいて、男の子たちと対等に戦っている。

長い道のりを走り抜けてきた馬は、ゴール直前ではスピードがだいぶ落ちて、四本の足が乾いた大地の上を空回りしているように見える。騎手の子どもたちは後ろに迫る馬に目をやりつつ、皮紐に短い木の棒を結び付けたモンゴル式の鞭を右に左に振り回す。少しでも順位を上げようと、必死の形相でラストスパートだ。ゴールして、鞭を持つ手を高々と挙げる子。悔しそうにうつぶむ子。走り切った安堵感からか、笑顔を見せる子。さまざまだ。

ゴールした馬たちの体には汗が光る。

長い距離を走り切りたくたであるはずの子どもたちだが、馬を降りるとひと休みすることもなく馬の世話をする。汗びっしょりの馬の背に毛布を掛ける。木のヘラで丁寧に馬の汗を拭いている。クールダウンのため、ゆっくり馬を引いて歩く子。大人と変わらぬしぐさで馬を労わる子どもたちの姿はたのもしい。

朝食のために一度ゲルキャンプに戻る。成田からの飛行機の遅れのため昨日からほとんど寝ていないので、少し昼寝をした。夕刻、ボルド校長が迎えに来て、再び競馬観戦に行く。次は三歳馬の二十キロレースだ。ボルト校長の持ち馬も出走するらしい。

今回は馬の横を車で伴走してくれるという。ゴール地点まで車で行くと、六十頭ほどの馬が勢ぞろいしていた。ゴールから始まる、というのはモンゴルならではのものだ。審判の合図で、スタート地点に向けて速足で向かう。足慣らしの二十キロだ。競馬に出るために選ばれた六

十頭の馬が、砂塵を巻き上げながら一斉に走る姿は壮観だ。朦々たる砂塵の中を、馬の列が続く。その堂々たる様子は、どの馬も「オレが一位になるんだ」と強い意志をもって胸を張っているように感じられた。

スタート地点に着く。日本の競馬のよう「各馬、ゲートから一斉にスタート」とはならない。広い草原にはもちろんゲートなどなく、六十頭がその場に横一列になり、審判の合図でスタートとなる。私たちの乗るワゴン車は、激走する馬の集団の左側を、馬と同じように激しく上下しながら走った。道路ではなく、自然のままのこぼこの草原を平均時速で四十キロほど、最高時速六十キロにもなるようなスピードで走るのだから、揺れ方は半端ではない。それでも運転手のマンガツハは、巧みなハンドルさばきとアクセルワークで、馬に遅れることなく車を激走させる。女性陣は、その運転をアトラクションのようだと行って、キャー

ーキャー叫んで楽しんでいる。メンバーの中で唯一、一眼レフカメラを持っていて私は、写真が撮りやすいようにと右側の特等席に座らせてもらい、揺れの激しい車から写真を撮り続けた。揺れはあまりにも激しく、覗いているファインダーから馬の姿が消えてしまうこともしばしばだ。「下手な鉄砲も数撃ちや当たる」と決め込み、シャッタースピードを四分の一秒に固定して連写し続けた。

スタートから数分後、小学校一年生ほどの幼い男の子が落馬した。空身になった馬はものすごい勢いで他の馬を抜き去り、あつという間に見えなくなった。男の子は泣きながらも自分で立ち上がり、並走していた一台の車にビックアップしてもらっていた。あのスピードで走る馬から落ちてもちゃんと自分で起き上がる所は、さすがにモンゴルの子どもだ。六年前にこの村を訪れ、落馬して気を失ったことのある友人に、帰国してからのこの話をする時、「俺よりすごい」と素直に

感動していた。

車は二頭の馬を追った。一頭目はボルド校長の馬だ。ボルド校長は「肌の色の馬だ」と教えてくれた。なるほど薄茶色で、「肌の色」という表現通りの馬だ。この夏は雨が降っていないので草が少ないせいも、多くの馬が少しやせ気味だ。ボルド校長の馬は、明らかに肋骨が浮かび上がっている。それでも走りは確かだ。騎手は、ボルド校長の学校に通うユスという十歳の少年が騎手を務める。私たちの車が近づくと、それに気づいてしきりにこちら側をうかがう。がんばらねばと思っただろう。だんだんスピードを上げ、何頭か抜き去った。

車は速度を上げて、さらに先を走る馬を追いかけた。こちらはボルド校長の馬より筋肉が盛り上がっていて、いかにも速そうな栗毛色の馬だ。騎手の少年の名前は聞きそびれたが、ユスより年長のようだ。車がその馬に追いついたとたん、私たちの車に同乗していた見知らぬ男が、

助手席から顔を出して叫び出した。聞けばその馬の調教師で、少年の乗馬コーチでもあるとのこと。からのペットボトルを右手でブンブン振り回しながら、大声で怒鳴っている。騎手の少年はちらちらとこちらを見て前を走る馬に追いつき、抜かしていく。三頭の馬を抜かした後、次の馬をなかなか抜かせずにいると、調教師の男が今度は助手席の窓から半身を乗り出して怒鳴る。なんとかその馬を抜き去ると、男はようやくおとなしくなった。シャガイ君に、何を怒鳴っていたのか聞くと「抜かさないと殺すぞ!」と言っていたそう。なんとも物騒なコーチだ。ゴールした後で少年に、

「コーチが何て言ってたか、聞こえたのかい」
と尋ねると、
「何言っただか、わからなかった」とのこと。それでも激しい叱咤であることだけは伝わっていたらしく、必死で馬に鞭を入れたそう。三十分ほどのレー

スだったが、全力で走る馬の迫力と馬を操る子どもたちの真剣な姿に、心から感動させられた。

ゲルに帰ると、夕食が待っていた。ハンホンゴル村では初めて口にするパスタ料理だ。山羊肉とジャガイモが入っていて、南ゴビ・スペシャルパスタとも呼びたい。ボルド校長の長女、エンクマーが調理してくれたそう。味付けもよく、昨日から切れ目なく続いた旅で疲れ切った体には嬉しかった。夜はボルド校長の家族やマンガツハ、バツソーシがゲルに入ってきて、ハンホンゴル村第一夜のさやかなウェルカムパーティーとなった。モンゴルで宴会となれば、アルヒ（モンゴルウオッカ）がつきものである。通訳のシャガイ君を介しての会話はスムーズにはいかないが、楽しいひと時だった。

私は、久しぶりのアルヒをつい飲み過ぎてしまった。疲れていた体に四十度のアルヒは効きすぎて、次の日は二日酔いに苦しむことになる。

お祭り気分

翌日はまた、お粥とパンの朝食を摂った。メンバーから分けてもらったインスタントみそ汁が、二日酔いの胃に沁みる。

この日も昨日のスタジアムに行き、今度はモンゴル相撲の観戦だ。まずはボルド校長の案内で来賓用のゲルに入る。村で準備したゲル、鉱山開発会社のゲルなどを回り、中でお菓子をつまみながら少し休む。ゲルには地元の有力者が頻繁に出入りしていた。ゲルを出て会場周辺を歩くと、昨日同様、民族衣装のデール姿の人たちが楽しそうな面持ちで挨拶し合っている。広大な面積をもつハンホンゴル村である。祭りの場で久しぶりに再会する人々が多いのだろう。会う人会う人に握手し、懐から嗅ぎ煙草の容器を出して相手に渡している人も少なくない。

美しい袋から厳かに取り出す嗅ぎ煙草の容器は、石で作られたボトル状の小さなものだ。その容器の中に入っているお

香の粉を練ったようなものが嗅ぎタバコで、容器の蓋に付いている耳かき状のもので搦って香りを楽しむ。袋も容器も香りもみな持ち主自慢の品で、「どうだ、いいだろう」と言わんばかりである。ひとときわ煌びやかなデールに身を包んだ落ち着きのある初老の男性が、見知らぬ私たちにも気軽に嗅ぎタバコの容器を差し出し、香りを嗅ぐよう勧め少してくれた。立派なボトルで、中身は持ち主のごとく落ち着いた香りだった。

短い儀式のあと、スタジアムのあちこちでいつの間にか相撲の取組が始まった。同時に四組ほどが試合をしている。四年前の旅で観戦した鉱山都市・エルデネットのナーダム規模とは比べようもないが、それでも熱戦が繰り広げられている。ここでは、実力のある力士が自分で相手を選んで闘う。土俵は無く、自由に動き回れる。手はついていても良いが、膝や背中が地面についたら負けである。勝った力士は帽子をかぶせてもらい、誇らしげに

鷲の舞を踊る。

しばらく観戦してから、マリとマハと私の三人で会場をひと回りした。お祭りらしく、いろいろな出店が並んでいる。

ジュースを売る店。アイスクャンディを売る店と続き、かわいいアトラクションの店もあった。安全のため体にゴムを結び付けてトランポリンで飛び上がるだけのものなのだが、遊園地などないこの村の子どもたちには大人気で、順番待ちの列ができていた。その近くに、畳ほどの大きさの板が立てかけられ、風船がたくさん貼り付けられているものがあつた。どうやらダーツの的らしい。マリとマハはダーツに挑戦し、いくつか風船を割った。そのうち他のメンバーもやって来て、ダーツに興じた。いつものほんとしているように見えるカナだが、七つも風船を割って賞品のシャボン玉セットをもらっていた。カナ、恐るべし。

大草原のシャボン玉遊び

お祭り気分をたっぷり味わってゲルキャンプに帰ると、ボルド校長から午後も競馬があるから見に行かないかと勧められた。けれどもこの日は皆、疲れが出てきていて、午後はゲルキャンプでのんびり過ごすことにした。昼食は野菜入りのボウズとレタスサラダだ。今までこの村で食べたことのあるボウズは、山羊肉だけを包んだものだった。オユーマ夫人が日本人は野菜が好きだということを考えてくれたの特別料理だ。メンバーの大半が若い女性だということも考慮してくれたのだろう。

昼食後、女性たちは、学校へのお土産に持参する折り紙の見本づくりに精を出した。私は二日酔いが辛くて横になっていたが、気がつくとき美しい折り紙見本がたくさん出来上がっていた。続いて、ハンホンゴル村最終日の学校でのパーティーに備えて、マリが出し物に用意した歌の練習をした。井上陽水の「少年時代」を二部合唱するという。マリが録音して

きた自分のピアノ伴奏を、スマホで流しながら練習する。南ゴビの大草原に建つゲルの中で、スマホを使って合唱の練習。不思議な取り合わせである。

モンゴルで流れる時間はゆったりしている。この日はまだ時間が有り余っている。若者たちは外でバレーボールをしようとしてゲルを出て行った。まだ二日酔いの頭痛と吐き気が残る私は横になっていたが、ゲルの扉の外に見える大草原のバレーボールがあまりにも楽しそうだったので途中から仲間に加えてもらった。バレーボールが得意なミキは大活躍だ。難しいパスもちゃんと拾っていいトスを上げる。モンゴルに来て毎朝トレーニングを欠かさない山ガールのヨコは、さすがに体力がある。まったく疲れ知らずで、いくらでも動き回れそう。楽しいことが大好きなマハも元気いっぱい、思い切りジャンプしてボールを打つ。マハの打ち上げた赤いボールは青空に美しく映え、ボールを見ているだけで心が洗

われるようだ。おかげで、次第に頭痛も吐き気も収まっていった。

若者たちは本当に疲れを知らない。今度はサッカーをやるうと言う。転がっていた棒を立ててゴールにし、大草原のサッカーが始まった。相手のいない方へパスすると、わずかに傾斜している大草原をボールはどこまでも転がっていつてしまふ。特にシュートしたときは大変だ。そこでシュートに関しては、外した者が取りに行くという特別ルールを作った。それでもボールは幾度も草原を転がっていき、走って拾いに行くのは難儀した。ハンホンゴル村あたりの標高は千五百メートルと、さほど高いわけではないが、いつ来てもここは酸素が少ないような気がしてならない。とにかく、ちよつと走るだけで息が切れるのだ。今年特に、二か月も続いている日照りのせいで草の光合成が十分でないということもあるのかもしれない。最近、幸せ太り気味のシヤガイ君は、私以上に息を切らしていた。

そんな訳で、サツカーはあまり長続きせず、今度はカナがお祭りのダーツで手に入れたシャボン玉セットを使って、シャボン玉遊びが始まった。シャボン玉遊びなんて、とバカにしたものではない。大草原のシャボン玉遊びは、なかなか風情がある。シャボン玉は、遮るものない大地をどこまでも飛んでゆく。マナが、先が楕円形になっている棒をシャボン液に浸して上に掲げる。すると風に吹かれて次々にシャボン玉が生まれ、はるか彼方まで飛んでいく。シャボン玉を作り出す棒を右手に掲げて風に吹かれているマナの姿は、自由の女神のようだ。今度はカナが、口をすぼめて棒の先の輪に息を吹きかける。子どものように強く吹きすぎて、うまくシャボン玉にならないのが微笑ましい。それでも何度か試すうちに、たくさんシャボン玉を作るのに成功して満足気だった。

シャボン玉

シャボン玉飛んだ 屋根まで飛んだ

屋根まで飛んで こわれて消えた
シャボン玉消えた 飛ばずに消えた
生まれてすぐに こわれて消えた
風々吹くな シャボン玉飛ばそ

シャボン玉遊びといえ、野口雨情のこの詩を思い出す。雨情は、生まれて間もない我が子の死を悼んでこの詩を書いたという。中山晋平の哀愁のあるメロデーと相俟って、どこまでも切ない。雨情と同じ体験をしている私には、辛い詩である。

最後はマリがシャボン玉に挑戦した。日は西に傾き、見る角度によってシャボン玉は虹色の光の玉となる。マリの吹いた虹色のシャボン玉が大草原に広がっていく様を、うつとりと眺めていた。南ゴビの果てしない草原を飛んで行くシャボン玉は、悲しみとは無縁、気持ち明るくさせてくれるものだった。「幸せ」というものを色に表せば、あんな色と形になるのではないだろうか。その「幸せ色のシャボン玉」は、生まれてすぐにこわ

れて消えることもなく飛んだ。見はるかす大草原を、見えなくなるまで飛んだ。虹色のシャボン玉に、救われたような気がした。

「愛してまゝす」

三日目は砂丘へのドライブだ。

砂丘を目指して、舗装されていない凹凸道をマンダツハの運転する四駆ワゴンにひた走る。道路標識など何処にも無い道。注意深く周囲の風景を見ながらコースを間違えないように運転している。

途中、マナの体調が悪くなり長い休憩を取った。慣れない環境と食事、そして悪路の激しい振動に胃をやられたらしい。車の陰にシートを敷き、横になって休んでもらった。トラブルも旅の楽しみ、後になれば必ず懐かしい思い出になるからと、慰めにならない慰めを言う。マンダツハ、バツソーシ、ボルド校長、シャガイ君のモンゴル人たちは、冷凍した塩茹の山羊肉を取り出して、うれしそうにナ

イフで削って食べている。そんなおやつタイムを楽しみながらのんびりとマナの回復を待ち、決して先を急がないでいてくれるのがありがたい。

モンゴル人が肉を食べている時は、ま

るで子どものようだ。無言のまま、実に美味そうに食べる。そんなに美味いものかと疑っていたが、一切れもらった冷凍の山羊肉は、なかなかのものだった。

「小石を臍に当ててベルトで押さえるといい」というマンダツハの助言に従いたっぷり休んだマナが少し回復したので、再び砂丘に向かった。

風に掃き清められた砂丘に着くと、皆、思い思いに砂丘でのひと時を楽しんだ。私がこの砂丘を訪れるのは四回目になるが、何度でもやって来たくなる場所だ。観光客を乗せたバスなどが来ない、まさらの砂丘に足跡を刻みながら登って歩き回り、手で掬った細かい砂を指の隙間からサラサラと落としていると、体に沁み込んでいるストレスも体からサラサラ

と抜けていくような気分になる。今回もまた、この贅沢な「お砂遊び」を楽しむことができた。砂丘への往復の車中では、おもしろいやり取りがあった。

通訳者兼ガイドのシャガイ君は、

「通訳とは、そのまま相手の言葉を訳して伝えることではありません」と言う。相手に正しく伝えることは大事

だけれど、直訳していたら喧嘩になることもある。よい雰囲気を作りながらコミュニケーションを成立させることが、通訳の一番の腕の見せ所だ。

そんなシャガイ君が、通訳者という立場を利用してときどき楽しい悪戯をする。今回の私たちの旅を支えてくれたモンゴル人たちには、嘘をついた。砂丘へ向かう途中「日本語で『ありがとう』はなんと言うのか」と尋ねられたときに、あることか「愛してまゝす」と答えたのだ。それ以来彼らは、ことあるごとに「愛してまゝす」を繰り返した。モンゴル相撲

の力士のような大男のマンダツハが、キヤンデイを一つももらっただけで「愛してまゝす」と言う。ガムをどうぞと手渡されたバツソーシも「愛してまゝす」。

「愛してまゝす」と言う時の二人の表情は、慣れない日本語を口にする恥ずかしさも手伝ってか、なんだかわいらしい。そんな彼らに付き合っ、私たちも笑いをこらえながら「愛してまゝす」を繰り返した。

砂丘からの帰り道、雲行きが怪しくなってきた。ゲルキャンプまであと十分ほどの峠道に差しかけた時、ついに雨粒が降ってきた。ハンホンゴル村の人々にとっては二か月ぶりの、待望の雨だ。これで少しは草に勢いが戻るのではないかと嬉しくなり、「愛してまゝす」と、天に感謝の気持ちを伝えた。

シャガイ

私たちの通訳者兼ガイドのシャガイ君。正式にはムングンシャガイという名だ。

そして、その名の意味するところは「銀のくるぶし」なのだそうだ。
モンゴル人なら誰でも知っている遊びがある。その名も「シャガイ」。羊や山羊のくるぶしの骨を使った遊びだ。砂丘から帰り夕食を食べた後、ボルド校長、オヨーマ夫人、ジャガー、バツソーシ、マンダツハらがそろって私たちのゲルに入ってきた。そして山羊のくるぶしの骨を何十個も、袋から出した。「これからみんなでシャガイをしよう」というのである。

シャガイにはいろいろな遊び方があるという。若い女性たちを前に少年のようにはしゃぐバツソーシが、熱心に遊び方を教えてくれた。

山羊や羊のくるぶしの骨は、転がし方によって四つの異なる面を見せる。それぞれの面の形には特徴があり、その形からウマ、ラクダ、ヒツジ、ヤギと決められている。

まずは一人二個ずつシャガイを手を取

り、みんなで一斉に中央に転がしてから指で弾く遊びだ。道具立ては違っても、遊び方は日本のおはじきと似ているのに驚く。同じ面が上になったシャガイを見つけて指で弾き、ほかのシャガイに触れず同じ形のものだけに当たったら自分のものになる。同じ面を上に行っているシャガイがいくつもある場合は、どれを先に弾くか作戦が必要だ。遊び方は簡単だが、やってみるとおはじき以上に頭を使うので、奥が深くて楽しい。

次に教えてもらったのは、競馬遊びだ。シャガイを十数個一列に並べ（何個でもよいらしい）、両端がスタートとゴールになる。スタート地点にめいめい自分のシャガイを駒として置き、別に用意した四つのシャガイをサイコロのように転がす。転がして上になった面のうち出たウマの面の数だけ自分の駒を進める。すぐろく遊びのようなものである。競馬に見立てている所がモンゴルらしい。これも単純な遊びながら、みんな熱中した。

移動させてしまったのだ。その彼の一家が、雨が降ったので草もよくなるからと、急いで私たちのいるゲルキャンプの近くに移動して来たという。

モンゴル滞在中にふざけて「愛してまゝす」を連発したことで、帰国後に少し困ったことが起きた。職場でつい「愛してまゝす」と言いそうになってしまうのだ。「愛してまゝす」を口に出しかけ、慌てて「ありがとう」に切り替えたのは二度や三度ではない。

を笑わせた。

友人のゲル訪問
ハンホンゴル村で過ごす最後の一日となった。朝食をすませると、ボルド校長からうれしいニュースが知らされた。遊牧民の友人、バツトウンスレンが近くまで来ていて、私たちに会いたいと言っているらしい。実は今回の旅を計画した四月、彼のゲルの隣にキャンプ地を構えてお世話してもらおう予定になっていた。しかし、あいにくの六月からの日照り。草の生育が悪く、七月に入るとハンホンゴル村の中心部近辺では放牧ができなくなり、草の状態の良い遠くの草原へゲルを

移動させてしまったのだ。その彼の一家が、雨が降ったので草もよくなるからと、急いで私たちのいるゲルキャンプの近くに移動して来たという。

移動させてしまったのだ。その彼の一家が、雨が降ったので草もよくなるからと、急いで私たちのいるゲルキャンプの近くに移動して来たという。

ゲルの前に立つバツトウンスレンが、車から降りた私たちを笑顔で出迎えてくれた。相変わらずの、誰をも包み込むような優しく温かな笑顔で、まずはゲルに入れという。ゲルには彼の妻や娘、孫たちが居て、やはり優しく温かい笑顔で迎えてくれた。

さっそく馬乳酒が振る舞われた。ラクダや山羊の乳で作ったチーズにラクダ酒、山羊肉の背脂やご自慢の嗅ぎタバコ等などの接待が続く。一度外に出て、ナーダムで使われていたゲルの解体作業を見学する。少しだけ手伝わせてもらったが、解体はほんの三十分ほどであっけなく終わった。

再びゲルに戻る。そこに用意されていたのが、山羊肉入りの塩味のミルクティード。お湯に山羊の乳を混ぜ、そこに山

シャガイにはほかにいろいろな遊び方があるそうだ。シャガイ遊びが得意なバツソーシは、若い女性たちに囲まれて、夜が更けるまで熱心に遊び方を教えていた。

オヨーマ夫人は私たちへのお土産として、シャガイ遊び用のフェルトのシートを一人一人にくれた。小さめの丸い座布団ほどの大きさで、夫人の手作りの品である。私たちは口々に「愛してまゝす」とお礼を言った。

正直者の私は、ボルド校長の長女エンクマーに、あとでそっと伝えた。

「シャガイ君は嘘をついた。『愛してまゝす』は、I Love you. という意味だよ」

しばらくぼかんとしていたエンクマーが、突然笑い出した。そして「愛してまゝす」の意味を両親やマンダツハたちに伝えると、笑いの渦となった。剽軽者のマンダツハは、本当の意味がわかったあとにも「愛してまゝす」を使い続けて私たちが

羊肉を放り込み煮込む。お椀にたっぷり注がれた肉入りのお茶は、お茶というより肉の出汁のよく出たスープという感じだった。この日は肌寒いほどの天候だったので、このお茶がやさしく体を温めてくれた。お礼代わりに、

「雨が降りすぎる日本から、お土産に雨を持ってきたよ」

と伝えた。バツトウンスレンは、「ザー、ザー（そうか、そうか）」と口にしながらいれそうにうなずいてくれた。

温まった体で外に出てメンバー一人一人の乗馬姿を写真に収めると、またゲルへ。ゲルにはバツトウンスレンの親戚が次々に集まって来た。まだ昼前だというのに、ナーダムの余韻を味わうかのようアルヒが開けられ、酒盛りが始まった。そのうちに指の出し方で勝敗を決めるジャンケンのようなゲームが始まり、大いに盛り上がった。ゲームに負けると、アルヒを飲み干すという罰が待っている。だれもが子どものように本気で指を出し

て対戦し、負けたものがアルヒをあおる。ゲルの中は、あつという間に酔っぱらいだらけになっていった。あまりの盛り上がり様に、このままでは私たちが酔いつぶされてしまうのではないかと心配になり、そつとゲルを出た。バットウンスレンはすでに宴会の主人公となって酒盛りに夢中になっていたが、彼の妻や孫たちがゲルの外に出て丁寧に見送ってくれた。

この地に着いた時には、茶色っぽいかにも元氣のない草原だったが、二か月ぶりの雨に濡れた草原は、心なしか緑が濃くなったような気がした。

学校訪問

午後はいよいよ最後のイベント、ハンホンゴル芸術専門学校の訪問である。学校へ行く前に案内されたのは、学校のすぐ近くにある文化センター。改装されたばかりのセンターには、教室程度の広さの「村立博物館」ができていた。まだ一般公開していないというが、責任者の方

が展示物を丁寧に説明してくれた。村の周辺に棲むめずらしい野生動物の剥製と、壁にぶら下げられた狼や狐の皮。角が口の方に曲がって伸びてしまったために、草が食べられずに餓死したという野生の羊のめずらしい頭骨。極めつけは恐竜の卵の化石だ。ウランバートルの博物館ではガラス越しに写真を撮るだけでもお金を払われるのだが、ここでは手に取ってもいいと言う。熱心に説明を聞く私たちのすぐそばで、マンダツハは茶目っ気たっぷりに羊の角を頭に当ててにこにこしていた。まったく、かわいいおじさんである。

「見に来てくれてありがとう」という責任者の言葉を後に、学校へ。入り口の近くに、きれいにペンキが塗られたベンチが置かれている。マンダツハが、「オレが作ったんだ」と自慢気だ。若い女性たちと一緒にそのベンチに座らせて写真を撮ると、まんざらでもない顔をしていた。

校舎内に入ると、前に来た時より教室がきれいになっている。理科室に入って驚いた。電子黒板機能付きのプロジェクトがあるのだ。十二年前、中古のノートパソコンを届けるために初めてこの学校を訪れたのを思い起こすと感慨深い。あの時に見た教室には所々剥がれ落ちていたような古い黒板しかなく、どんな授業が行われているのだろうかと心配になったものだ。それが今は、どの教室にも大型のテレビが入り、理科室には電子黒板もある。ポルド校長によれば、今、モンゴルは教育にとても力を入れていて、最近になって義務教育は十二年になったという。高校まで義務教育ということだ。日本の四倍の国土に人口はわずか二百八十万人ほどのモンゴルでは、人が宝だ。教育改革への熱意と改革の速度が速いのもうなずける。そして何より感動したのはポルド校長の次の言葉だ。

「私たちは、生徒の才能を見抜くことを大切にしている。音楽が得意な生徒には

専門的な音楽教育のコース、踊りが得意な生徒にはモンゴルの伝統舞踊やダンスを学ぶコース、そして絵が得意な生徒のために美術のコースもある。一人一人の才能を見つけ出し、それに合った教育をすることで、生きていく力を身につけてもらおうとしているのだ」

芸術専門学校とはいえ、誰もが芸術関係のすぐれた能力をもっているわけではないから、芸術以外の道でも才能を見つけ出し伸ばすことも忘れていない。ハンホンゴル芸術学校の卒業生でもあるポルド校長の娘のエンクマーは、医学の道に進んだ。私が彼女に会ったのは十二年前。彼女はまだ小学校一年生だったが、長い詩の朗読を一度もつかえることなく披露してくれたのには驚かされた。彼女の優れた記憶力は、今、医学の道を歩むための才能として生きている。教師は生徒に勉強を教えるだけでなく、一人一人の個性を見抜き、明るい未来を予言し、そこに向かわせることのできる優れた易者

のような存在でなければならぬのだろ。親もまたしかりである。日本の教育について、大きな課題を突き付けられたような気がした。

思索にふける間もなく、パーティー会場の集會室に移動する。私たち日本人のテーブルにだけ、給食調理員さんが用意してくれた肉料理とご飯が置かれる。ラクダの肉を玉葱と一緒に炒めたものだ。それをご飯に乗せて食べる。メンバーのだけれが「ラクダ丼だ」と声を上げた。

言い得て妙である。興味津々、教職員が見つめる中、日本の牛丼屋では絶対に食べることのできない、ハンホンゴル芸術専門学校給食室特製・ラクダ丼を食べた。少し硬いがあまりくせは無く、脂肪の少ない牛肉のような食感だった。

食事が済んで、学校へのお土産の披露をした。今回は、学校側からの要望を受けてマナとカナが用意した絵筆や絵具などの画材と、マハが用意した北斎の浮世絵の風呂敷である。風呂敷は、上と下に

棒を通してタペストリーのようにしたものだ。北斎独特の波と富士山の浮世絵に、モンゴル人たちの目は釘付けになった。富士山は理解できても、誰も海というものを実感できないからか、「海から富士山が見えるのか」という素朴な質問が出た。

「富士山は周りに山が無い独立峰だから、海からでもよく見える」と答えると、みな感心してうなずいていた。

教職員一人一人には、ミキとヨロコが用意したかわいいキャンディーと折り紙、それにお菓子の形状の消しゴムのセットをプレゼントした。南ゴビでは見たことのない品なのだろう。だれもがにこにことうれしそだった。

パーティーではいつも、モンゴルと日本のお土産の交流をする。今年はハンホンゴル村創設九十周年ということで、教職員がハンホンゴルの村歌を合唱してくれた。歌詞を覚えていない教職員がたく

さんいたのはご愛嬌である。日本側からは、「少年時代」の二部合唱とマナの阿波踊りが披露された。小学生の頃から高円寺の阿波踊り連に所属し、ずっと踊り続けているマナのはっぴ姿の踊りは実に美しく、教職員はもちろん、伝統舞踊を学んでいる生徒たちにも大いに受けた。マナの踊りに倣ってみんなで阿波踊りを踊ったあと、「マナ師匠の阿波踊り教室」が始まった。マナ師匠の踊りを手本に、生徒たちは熱心に学んだ。さすが、踊りを専門に学ぶ生徒たちだ。難しい手の使い方や腰の落とし方をあつという間に覚えて、美しい阿波踊りを見せてくれた。

阿波踊りのお札にとモンゴルの踊りを披露してくれた生徒たちが、ミキとカナに民族衣装を着させてくれた。ミキは踊りの名手のように変身。このまま学校に置いて行こうかと思ったほどだ。カナはおどけたポーズで写真に写ろうとしてモンゴル人たちに怖い顔でたしなめられた。

が、そんなことは意に介さず、カナ独特のおどけたポーズのまま写真に収まった。カナ、恐るべし。

その後は好例の、日蒙乱れてのダンスタイムである。ダンスというものが大の苦手の私にとってはこの時間はいつも苦痛なのだが、若い女性たちは実に楽しそうだった。ヨロコは少し照れながらも楽しそうに踊り、マハはバツソーシやシャガイ君らと踊ってはじめていた。マリは、パーティーの途中、別室で横になって休むほど体調が悪かったのに、踊り始めたらすっかり元気になった。マリ、恐るべし。

いつ果てるかもしれないダンスパーティーだったが、突然の停電のおかげで再開となった。モンゴルの停電にはいつも悩まされるが、踊りが苦痛な上、メンバリーの体調も気になっていた私には救いの神だった。

ハンホンゴル村の明日

しれないが、これからも交流を続けて少しでも力になりたいと願う。

そんな思いから、ウランバートルに戻る朝、空港に向かう車中でボルド校長に尋ねた。

「今、この学校でいちばん欲しいものは何ですか」

ボルド校長はしばらく考えてから、「寄宿舎には百人の生徒が生活し、幼い子どももいる。それなのにトイレは未だに寄宿舎の外にある。寒い冬の晩に、子どもたちをトイレに行かせるのがかわいそうで仕方がない。だから寄宿舎の建物の中にトイレが欲しい」と言った。冬場はマイナス三十度にもなる極寒の地で、幼い子どもが寄宿舎から外に出て用を足すのはどんなに大変なことだろう。

費用は日本円で四百万円近くかかるという。ポンと寄付できるような金額ではないが、何かしらの力になりたいものである。

終わりに、今回のハンホンゴル村訪問の第二の目的について記しておかねばならない。

二年前に目にした、地下資源調査のためのボーリング用タワー。その姿が目にした焼き付いて、気になって仕方がなかった。その後、炭鉱開発が進んで、村の様子が一変しているのではないかと、正直な所心配を抱えながらの訪問だった。あのだこまでも続く大草原を、馬に代わって、石炭を満載した大型ダンブカーが埃を巻き上げながら走り回る様子は見たくないけれどもそんなことは、たまにこの地を訪れる私たちの感傷であり、身勝手な願いでもある。現地の人々の生活が豊かになるのであれば、それも良しとしなければならぬのだろうという諦めに似た思いを抱いて再訪したのだ。

しかし、二年ぶりのハンホンゴル村で大型ダンブを見かける機会は一度もなかった。相変わらず、のんびりした風景にのんびりした時間が流れ、遊牧の民の

生活はそのまま続いていた。聞けば、炭鉱開発は頓挫したままになっているのだという。モンゴルは今、国全体の景気が停滞気味で、開発のための十分な資金が調達できないでいるのだそうだ。遊牧以外にこれといった産業のないハンホンゴル村にとっては、大規模な炭鉱開発はまたとない発展のチャンスだ。村の人々は大いに期待していたに違いないが、村の経済は二年前と大きくは変わっておらず、相変わらず楽ではなさそうだ。けれども豊富な地下資源を抱える村であるから、近い将来、大規模開発が始まり村人の生活が一変する日も来るのだろう。今は水面下で起きているような変化だが、これから間違いなく大きな変化が表面化するはずだ。これからも村を訪ねて、その変わり様を見届けていきたい。

ボルド校長以下、教職員の努力で、ハンホンゴル芸術専門学校は着実に近代化され、かつてない活気さえ感じた。私たちに支援できることはあまりないのかも

今回の旅は満月の前後の時期だったので、満点の星空も流星ショーもあまり期待していなかった。それでも滞在中、流れ星を三度見るチャンスがあった。まずはゴビのキャンプ地で。次に、ハンホンゴル村からウランバートル近郊の保養地テレルジに移動した晩。この二つの流れ星は、願いごとなどする間もなくあつという間に流れて消えた。

三つ目を目にしたのは、帰国前夜のウランバートルのホテルの部屋から。なかなか寝付けずにいた深夜、窓の外に目をやると思いがけず星が流れた。咄嗟に思いついた願いごとを早口でつぶやいてみた。つぶやくタイミングが少し遅れたので叶うのも少し遅くなるかもしれないけれど、この願い事はいつの日かきつと叶うに違いないと思った。

— つづく —